

Keisuke Kawakubo, *The Civilizational Soul*, Kojinsha, 2015.

川窪 啓資

序文

第三章 文明と道徳

第一章 比較文明の展望

第一節 正統性、伝承の系列、政治形態

第二節 実践上の地球倫理

第三節 共通の英知に向かつて

第二章 文明と宗教

第一節 トインビーにおける文明と宗教

第二節 多くの宗教が存在する世界における宗教に対する考

え方

第三節 イエス・キリスト、ゴータマ・ブツダ及び空海の靈

的伝播の道行き

第四章 二つの文明と一つの都市

第一節 日本文明の本質を探究する私の旅

第二節 アメリカー人類の巨大な実験場

第三節 中国瞥見ー過去、現在、未来

第四節 比較文明から見たサントクト・ペテルスブルグ

第五章 文明の魂

第一節 モラロジー紹介―東洋と西洋をつなぐもの

第二節 モラロジーの国際化に向けて―ラワリーズ博士の

「国家伝統」に対するご提案に対する私見

第三節 文明の魂を持った二人の日本の巨匠―広池千九郎と

森鷗外

第四節 西洋の道徳科学の歴史から見たモラロジーの無比性

注

文献表

索引

第一章 文明の比較研究の見通し

本書執筆の一九九九―二〇〇〇年という年は、先輩諸学者の比較文明についてなした業績を精査し、さらにこの分野の未来の発展について展望する年である。

私自身はアーノルド・J・トインビーの研究から始め、関連する他の学者に研究対象を広げていった。

『白鯨』の著者であるハーマン・メルヴィルは世界中からの移民によって出来た自分の国アメリカの世界性を述べている（『レ

ッドバーン』参照）。

比較文明学会はその名前の示す様に、世界中の学者が参加するものであるが、残念ながら従来、西洋の学者が多かった。しかしだんだん東洋の学者も参加するようになった。ISCS（国際比較文明学会）とJSSC（日本比較文明学会）の初めての集会は麗澤大学において行われた。

ここで簡単に書いているが、西洋の学者は世界といっても西洋だけを指すと往々にして考えがちであった。彼らの世界は西洋中心であった。世界の中心は西洋だけであり、東洋は殆ど入っていなかったのである。ただ稀に東洋へ行った西洋人の旅行者の話が出てくる程度であり、彼らの世界観の中に東洋の占める割合はごく小さかったのである。それに東洋人の世界観でもそうであり、お互いあまり知らなかったからである。現在の我々が持っている世界観などは、ごく最近の事である。西洋人だけでなく東洋の人々もそれほど公平な世界観を持っていた訳ではない。

これはお互い様で、西洋人の世界観としても東洋人の世界観としても公平であったとは言いがたかったのである。しかし近世において西洋人がより進歩が大きく、東洋観も彼らが作り上げて行ったので、それに遅れて東洋の人々もそれを読み、自分達の世界観を作っていたのである。

第二章 文明と宗教

第一節 トインビーにおける文明と宗教

1 トインビーの歴史観の概略

トインビーの歴史観はその長い研究生活においてさまざまな形で変化してきた。第一段階は彼の母親から幼少時代にイギリス史の話が聞かされて、歴史に深い興味を育んだことである。

第二段階は文明史の研究（彼の著である『歴史の研究』第一―第六巻）この時代では彼の歴史観は文明の生誕、成長、挫折、解体という循環論であった。解体の段階で、魂の分裂がおこる。そして文明は支配的少数者による世界国家、および内的プロレタリアートによる世界教会、および外的プロレタリアート（野蛮）が文明の土壌の中に生ずる。

第三段階は歴史研究の理解可能な概念としての文明の概念が成立しなくなる。歴史研究の理解可能な領域として、文明の概念が成り立たなくなると、彼の名著『歴史の研究』第一―第七巻において、高等宗教という文明より重要な概念が登場する。それは超国家による概念である。彼は歴史とは神が身を現す神のヴィジョンであるという。歴史の目標は神の王国である。トインビーの歴史観は、循環論から絶えず進歩発展する歴史観へと変化していった。

ここでまず今までの論述をまとめると、母親からの教育でイギリスの国民史の歴史家になる事であった。次には国の歴史よりもっと大きい文明の研究へと広がっていかうとする。

次に、世界の個々の文明の研究よりさらに大きな文明を超えて世界の宗教の研究に広がっていった比較宗教の世界である。研究の対象は個々の国家を超えた宗教の世界へと向かっていった。この段階では個々の時間軸を超えた宗教の世界へと広がり、深化していった。歴史家というより宗教研究者の内容を持った人間になっていったのである。

世界には様々な宗教がある。その信者が自分の宗教が一番良いと信じている。そこでとまれば問題がない。他の宗教より自分の宗教が良いと言ってお互い争うようになる。これが宗教戦争である。平和を目的としている宗教でも宗教戦争は良くない事である。

第二節では多宗教の存在する世界における宗教についてのトインビーの見解を述べる。トインビーのこれからの文明における宗教観について述べたサムエル・ハンティントン『文明の衝突』と世界の将来について述べた。

第三節はイエス・キリスト、ゴータマ・ブツダ、空海の靈的伝達の道について略説した。彼らの偉大な人格力は不思議な力をもって他の多くの人々に感化を与えていった。それは不思議な伝道力をもっていた。それらの事跡を調べてみるとわかる。

彼らはテレビ、ラジオ、電話などの無い時代に広く遠く、そして永続的な感化力をもって多くの人に伝えようとしたのである。その伝道力は、千年、二千年と伝わっていったのである。これはラジオ、テレビなどの近代的伝導方法を超えたものであると言わざるを得ない。

第三章 文明と道徳

第三章 文明と道徳の第二節は、実践的世界倫理と題している。生命は死より良い、健康は病気より良いとかいう大多数の人々が首肯するような命題も、ある特定の時と場所によってはそう簡単にはいかないのである。地球的倫理の前に地方的、部族的、国家的倫理が現存しているからである。倫理 (ethics) は元来、習慣や風習である。(p. 五六) それをどういう風に普遍化するかが問題なのである。貴方の父がいつ果てるか分からない。苦しんでいる時、癌の苦しみにある時に、貴方はそういう父の苦しみを見るのが良いか(p. 五七) 墮胎は全て罪なのか(p. 六〇)

胎児 (fetus) は人間として扱われるべきか、というような様々な問題が出てくる。

トインビーは高等宗教も様々あって、自分の信ずる高等宗教が神の光を独占しているというのは、倨傲であると述べている。トインビーは Quintus Aurelius Symmachus (c. 三四五—c. 四〇五) を出して、神の光を独占していると主張する事は出来ないと述べている。

広池千九郎は五人の聖者、ソクラテス、イエス・キリスト、釈迦、孔子、神道の祖の教えをまとめて最高道徳とした。そしてそれを人類に最高道徳として提示した。

第四章 二つの文明と一つの都市

「二つの文明と一つの都市」とし、まず私の日本文明の精髓探求の旅とし、広池千九郎、『日本書紀』『古事記』の精神を伝えんとした。

人類の巨大実験場として、アメリカを論じた。

第一節 日本文明の本質を探究する旅

トインビーは、伊勢神宮(天照大神を祀る)を全ての宗教の基にある聖なる場所と一九一七年に詩で述べている。(ヴェロニカ夫人談) この聖なる場所に全ての宗教の基になる神聖を感じる。

ここでは日本文明とアメリカ文明をとりあげる。まず最初は日本文明を考察する。伊勢神宮は日本の神道の根本の宮であり、すなわち天照大神を祀っている。それは自ずから神聖な気があり、初めて訪れたトインビーもこの神聖な場所について「あらゆる宗教の根底にある統一性を感じる」と述べている。(一九一七年十一月二十四日)

祀られている天照大神は弟のスサノオノミコト(暴れん坊であったが)を、慈悲寛大自己反省を実行されて、日本の皇室および日本国民の精神的中心の神となったのである。この女神の精神が日本皇室および日本国民に伝わっている。これは古事記および日本書紀に記録されており、日本国民の精神的拠り所となっている。

大嘗祭は、新しく収穫したお米を天照大神と共に食するという儀式で、新しく即位した天皇に伝わる儀式である。

アメリカ文明は、一六〇七年のピルグリム・ファーザーズ(Pilgrim Fathers)がジェイムス・タウンに足跡を残した事から始まった。ニューイングランドから新大陸の開拓が始まった。ニューイングランドという名前の示す様に、イギリス人の開拓から始まった。現在のボストンの辺り(マサチューセッツ州)の開拓が始まり、そしてニューイングランドと云う様になった。それか

ら、カリフォルニアや南部の開拓が始まり、アメリカ大陸へと広がったいった。

私は、二年間の留学中(一九六四—一九六六)、グレイハウンドバス、乗用車、電車でアメリカ全土をほとんど走破したが、行けども行けども同じ景色が続いていくのには驚かされた。

第五章 文明の魂

第五章「文明の魂」では、広池千九郎の創設したモラロジー研究所の紹介—東洋と西洋をつなぐものとして論じた。

全ての文明には隠れた核心がある。それが文明の魂と云う。表現は様々であるが理想である。

第一節では東洋と西洋を繋ぐものとしてモラロジーを紹介している。さらに、モラロジーの国際化の一環としてイギリスの碩学ラワリーズ博士の所見を紹介した。ラワリーズ博士の国家伝統に対するご意見に対する私見を述べる。

日本人巨匠、広池千九郎博士、森鷗外の二人を紹介し、東洋の Moral Science の歴史から見て、日本の Moral Science (すなわち Moralogy) の無比性について論じた。